

第65回

上高井教育研究集会概要

平成30年度



上 高 井 教 育 会
上 高 井 校 長 教 頭 組 合
県 教 職 員 組 合 上 高 井 支 部

目次

まえがき	1
大会スナップ	2
1 子どもの適応と人間関係づくり	4
2 子どもの生活づくり	5
3 キャリア教育と進路指導	6
4 人権同和教育	7
5 健康教育	8
6 子どもと地域社会と環境づくり	9
7 子どもとスポーツ・遊び	10
8 教育条件の整備	11
9 情報教育	12
10 国際理解・コミュニケーション活動	13
11 特別支援教育	14
12 表現力・感性、思考力の育成	15
13 子どもと本	16
あとがき	17

ま え が き

上高井教育会、上高井校長教頭組合、長野県教職員組合上高井支部の三者共催による「第65回上高井教育研究集会」を、去る9月1日（土）に墨坂中学校を会場として開催いたしましたところ、会員、保護者、地域の方々を含め、600名余の皆様方のご参加をいただき、盛会のうちに終了することができました。

ご多用の中、県議会議員 村石正郎様、須坂市、小布施町、高山村の教育長の皆様方をはじめ、上高井の教育を支えていただいているご来賓の皆様方のご臨席を賜りましたことに深く感謝申し上げます。

また、地域の皆様、P A Tの皆様、教育関係者の皆様には、早朝よりご参集をいただきありがとうございます。さらに、助言者の皆様方には、ご多用にもかかわらず快くお引き受けいただき、具体的で分かりやすいご助言・ご指導を賜り、実りある研究集会となりました。誠にありがとうございました。

近年、少子高齢化、グローバル化、高度情報化、子どもの貧困の問題など、子どもたちを取り巻く家庭・社会環境が大きく変化してきています。人と人との結びつきが希薄化し、子どもたちの学ぶ意欲や学力・体力の低下、ゲームや携帯電話・スマートフォンなど、インターネットに絡む問題や依存の問題、教育力や教育環境の低下など、多くの面での課題が指摘されています。こうした課題について、上高井の子どもたちにおいても例外ではないと思います。

一方、本年度は、念願でありました須坂支援学校の中学部の生徒の進学先としての長野養護学校高等部分教室が須坂商業高校の敷地内に開室されて三年目を迎えることができ、すべての学年で生徒がそろうことになりました。また、「須坂創成高校」が開校四年目を迎え、須坂園芸高校、須坂商業高校、須坂創成高校が名実ともに「須坂創成高校」に統合されました。このように、地域の皆様のご支援・ご協力により、子どもたちを取り巻く教育環境が整備されてきています。

こうした社会環境で生活する子どもたちの教育問題を考えるとき、学校・家庭・地域が個別の問題として捉えるのではなく、連携を強化し、社会全体の教育問題として、一緒になって考え支え合うことが益々大事だと思います。

本研究集会におきましては、日頃の教育実践を持ち寄り、成果と課題、悩みなどを、教職員とP T Aの皆様方と子どもたちの教育に携わっている方々と一緒に語り合うことを通して、子ども理解を深めたり、教育支援の和を広げたりして、私たち自身の資質向上を図るとともに、「地域の子どもは地域で育てる」という地域教育の振興に寄与することができたと思います。関係者が連携して取り組めるために、教科別テーマではなく今日的課題であるテーマ別分科会を設定しておりますのも、本研究集会の特質です。地域の課題を明らかにし、解決に向けて共に学び合い、そして協働で課題解決に取り組むことができる上高井になることが、子どもと大人の幸せの実現につながると信じています。

最後になりましたが、教育研究集会の開催に向けましてご尽力いただきました黒岩龍也研究推進委員長をはじめ推進委員の皆様、各校において推進していただいた学校代表者の皆様、分科会を運営していただいた分科会長、司会者、記録者の皆様、貴重な実践レポートを発表していただいた皆様、会場を提供し準備していただいた三溝清洋校長先生をはじめ墨坂中学校の先生方、生徒のみなさんに深く感謝申し上げます。皆様のおかげで充実した教育研究集会になりました。ありがとうございました。

上高井教育研究集会委員長 北村 雅

平成30年度 教研集会スナップ



分科会において、助言者の先生方には丁寧な、温かいご指導をいただきました。

本年度も、教職員、PTA、地域の皆様をはじめ、大勢の方々にご参加いただき、ともに学び合う機会となりました。参加していただいた皆様、ありがとうございました。



今年度は、墨坂中学校を会場に教研集会が開催されました。

会場校の先生方には、会場準備等さまざまな面でご協力いただきました。感謝申し上げます。

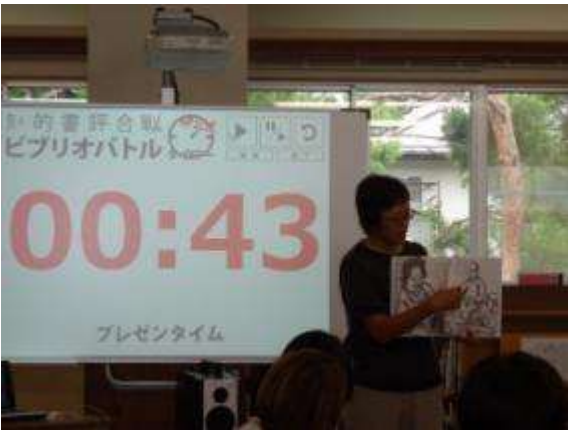


また、分科会長、司会者、記録者の皆様には分科会が滞りなく運営できるよう、ご尽力いただきました。



分科会にご自身の実践等を発表していただいた皆様、お忙しい中準備をしてくださりありがとうございました。





最後に、教研集会開催にかかわり、協力してくださった方々に心より御礼申し上げます。
ありがとうございました。

第1分科会 子どもの適応と人間関係づくり

一 研究テーマ

みんなが明るく学校生活をおくるための人間関係づくり

二 研究成果

1 レポート発表の概要

- (1) 「人とかかわりながら学ぶ授業づくり」 須坂支援学校 竹内 文宏 先生
・実践例の紹介：部集会を活用した学び合い、共同学習について
作業班会での生徒の心の変化と、教師の支援

- (2) 「コミュニケーションワークショップをやろう」 小布施中学校 松山 由美 先生
・なぜ今コミュニケーションを取り上げるのか
・演劇の練習の一つ「コミュニケーションワークショップ」について
・実践例の紹介（仲間さがし・大人の椅子取りゲーム・カウントアップゲーム 等）

2 学んだこと

- (1) ・自分の意見が尊重される場所があるということは、心地よく、安心感を与えるものである。「発表してみたい」と自発的な活動に発展していく。
・部集会を行うことで、願いが共有できたり、感想を出し合ったり自由に気持ちを伝えることができる。また、上級生だけでなく、下級生も意見を言える雰囲気ができるようになる。
・一人一人の子どもへの理解が重要であり、その子に沿った支援・声かけが必要であること。
- (2) ・ワークショップは、普段話せない人とも話ができる機会になる。
・集団の中に入っていくことが苦手な子には、気持ちの無理強いをせず待つ。すると、周りの楽しそうな雰囲気から自然と気がついて入っているような環境が出来る。
・自分を表現できる場所（居場所）ができ、自己肯定感が高まっていく。

3 助言者の指導

長野県教育委員会事務局 北信教育事務所 生涯学習課指導主事 小島 豪 先生

(1) 実践発表より

- ・集団づくりを支えているものは、子どもたちの願いを教師が把握していることにある。適切な子ども理解が必要。
- ・関わり合いの機会や活動の設定が安心感に繋がっていく。話し合いの活動からは、満足感や「もっと！」という新たな願いも生まれ、実生活に近い学びができる。
- ・自己肯定感と自信の醸成。失敗を恐れて正解ばかりを求めてしまわないように。

(2) ワークショップ

- ・仲間との関わり方を考える機会となり、その中で「気づき」が生まれる。
- ・体験活動で終わるのではなく、話し合いをしたり思いを共有したりすることで、いろいろな関わり方を学ぶことができる。

三 分科会を終えて

- ・参加者の人数が50名と多かったが、講義だけでなく、ワークショップなどの活動を多くすることを心がけたことによって、自ら体験・参加し、体で感じて帰ってもらえたことのできたと思う。

第2分科会 子どもの生活づくり

一 研究テーマ

家庭と学校・園で協力して考える、子どもの生活習慣

二 研究成果

1 レポート発表の概要

「中学生の家での過ごし方」平成29年度アンケートより 相森中学校 中島 萌先生

学習については平日の学習時間は1~2時間が最も多く42%。内容は宿題がほとんどであり、授業の予習をする生徒は少ない。また、46.2%が学習塾や家庭教師を利用していた。放課後や休日の過ごし方としては、半数以上がTVゲーム、インターネットを利用すると答えたが、その利用については62.7%の家庭がルールを決めていない。又、スマホに関しても65.6%が所持しているが、そのうちの24%は約束せずに利用していた。

2 学んだこと

グループ討議では、①TVゲーム・スマホ利用のルール決めについて②メディアに触れない生活について、主にこの2点について話し合った。保護者からは、ルールを決めていても徹底できていない、親も利用しているので子どもばかりに言えない等の悩みが聞かれた。一方で、実践している工夫や意見もたくさん出された。親と子で、スマホやゲームを与える前に約束事を決めるのはもちろんであるが、親である大人がまずは、メディアに関する様々なことを学び、知識を得ることが大前提であること。また、休みの日はスマホなど使わなくてもすむように、一緒に何かに取り組める時間をつくるか、スマホ以外で子どもの趣味や興味が広がるヒントを与えていくことも大切。スマホを子どもにとって悪とするのではなく、上手に使っていけば便利な面もあることを伝える。旭ヶ丘小のメディアコントロールの取り組みや、豊洲小の豊洲メディアデーは、他の学校でもできそうな取り組みである。スマホ所持はどんどん低年齢化しており、中学校や小学校の入学説明会にメディアコントロールの大切さについて伝えていくことも、これから必要になってくるのではないかと。スマホなどに関する生徒の意見文などを紹介発表する機会をつくり、子どもから子どもへと発信していくことで、子どもの意識を変えていくことも必要だと思われる。

3 助言者の指導 北信教育事務所学校教育課スクールソーシャルワーカー 宮寄 貞子 先生

子どもの現状として、不登校が増えている。いじめの認知件数も増えている。不安と無気力の子が大勢おり、その多くは背景に家庭の問題を抱えている。ネット依存の中高生は93万人おり、すれすれの子は161万人である。不登校から引きこもりになる子は多く、引きこもりはゲーム依存が非常に多い。ゲーム障害もWHOは精神疾患として定義している。つまりゲーム障害は病気である。毎日の生活リズムは一生のリズムにつながっていく。マズローの5段階欲求説にあるように、安心安全な生活がないと、人は生活していられない。社会の中で役割がある、仲間がいる、愛されているという満たされた思いが大切。昼夜逆転の子は孤独。誰ともつながれていないという気持ちが強い。そうやってゲームに依存していく。自分のことを自分で認め、人からも認められる、こうした経験があってこそ自分の生活をコントロールしていける。子どもの生活を考えることは大人の生活を考えること。大人ができることはたくさんある。スマホの使い方もゲームの区切り方もモデルとして大人が見せる。なぜだめなのか、何がいいのかをきちんと伝える。学校でできることは、生活を系統的に論理的にわかりやすく教えること。日中の活動は、子どもが学校に引きつけられるものが仕掛けられるといい。生活が整うことで、自分でスマホを切れる子に育っていく。文化的な生活を親が子に見せ、これを生活づくりにつなげていく。

三 残された課題

- ・家庭で子どもとどう関わっていくか。子の見本になるために改善していかなければならないことは何か。
- ・学校でのメディアコントロールへの取り組みもこれから工夫して取り組んでいく必要がある。

第3分科会 キャリア教育と進路指導

一 研究テーマ

夢と希望をもって自分の進路を切り開いていけるキャリア教育・進路指導のあり方

二 研究成果

1 レポート発表の概要

(1) 「2学年キャリア宿泊体験学習の実践報告」 常盤中学校 中村 仁美先生

- ・昨年度から引き続き行われたキャリア宿泊体験学習と職場体験学習についての報告。
- ・第1次産業、第2・3次産業の体験ができることは生徒にとって貴重な機会であるが、1学期にキャリア宿泊体験学習と職場体験学習の事前学習や準備を同時に進めていかなければならぬため、日程的には非常に厳しい。
- ・生徒にとってキャリア宿泊学習と職場体験で学んだことが自分のものになるように、教師側がねらいを明確にして計画することの大切さを感じた。

(2) 「3年間の総合的な学習の時間を活用したキャリア教育」 墨坂中学校 根岸 珠美先生

- ・総合的な学習の時間の活用の一つの方向性として、学校行事を通じて3年間を見通しながらのキャリア教育の実践報告。
- ・生徒が学習のまとめをパワーポイントで行い、学習の集積をデータとして保存するようにした。
- ・外部講師との関わりを通じて、職員が学ぶことが多かった。
- ・パワーポイントによる学習のまとめやワークシートによる3年間のまとめをキャリアパスポートとして活用していく方向性である。

2 学んだこと

(1) 墨坂中学校の3年間を通したキャリア教育実践から学ばせていただくことが多かった。職員負担が大きいという課題もあるが、各校の実情をふまえながら、取り入れていけたら良いと思う。

(2) 経済界・産業界の動きと教育はつながっている。世の中の動きを、大人がしっかり見ていないといけない。

3 助言者の指導

中野立志館高等学校 校長 田村 浩啓先生

- ・キャリア教育に答えはない。
- ・例えば、農業体験では、農業をメインとして「人との関わり」を学ばせたい。短期間で「農業」を学ばせるのは難しい。目的をしっかりと据えていくことが大切。
- ・コミュニケーションの力をつけていきたい。自分とは異質の人ともコミュニケーションできるか。誰の一言が人生を変えるか分からない。色々な人の話をきくことが大切。
- ・今回の学習指導要領改訂のターゲットは、義務教育ではなく高等学校。学びの過程を記録し、累積していくことが必要になっている。

三 残された課題

- ・“キャリア・パスポート”を異校種間でどうつなげていくか。
- ・須坂市内で、地域性を生かした体験活動（農業体験など）ができないか。

第4分科会 人権同和教育

一 研究テーマ

人権を尊重し、人権問題を解決しようとする児童・生徒を育てるための指導のあり方

二 研究成果

1 レポート発表の概要

(1) 「部落差別に対して正しい知識を持ち、子どもたちに伝えるために」森上小学校 成田亜弓先生

生
上
観
も

実践の成果として、自分の部落差別に対する認識の変化が起きたことと、実践をすすめていく

での課題が見えてきたことがあげられる。

討議では、小→中→高→社会と段階を踏んで継続した人権同和教育の必要性や、新しい部落史

を踏まえながらもこれまでの差別の事実もきちんと伝えて、子ども達の正義感にうったえる学習

続けていく重要性が語られた。

(2) 「～井上小学校の人権教育の実践～」

井上小学校 石川 智広 先生

実践の成果は

- ・学校行事だけでなく学年、学級、児童会、PTAでの活動を通して人権に対する考えが深め

ら
か
学

れた。

- ・異学年交流で高学年は思いやりを持って低学年に優しく接し仲間づくりができ学校全体で温

い交流ができた。

- ・保護者が子ども達の実態や学習内容に合わせて読み聞かせをすることで人権に対する考えや

習を深める事ができた。

の3点が上げられる。

討議では、子ども達は活動することが経験となり自信を持った行動ができていくので見直しを

繰
発

り返しながら続けていくことが重要であるとか、自己肯定感とともに有用感も大切にしたい等の

言がなされた。

2 学んだこと

(1) 「心のものさし」で自分の立場を示す活動は、考えを言葉で表現させるために有効である。

(2) 「人生よかったかるた」はマイナスをプラス思考に見方を変える大切さを学べる。

3 助言者の指導

須坂市人権交流センター指導員 畠山 信重 先生

道徳科における人権教育において、まず道徳科としてのねらいを達成させることが求められる。ね

ら
問

いとす内容項目をはっきりさせて、そこに向けて初発の発問はシャープにしていきたい。開いた発

は自由に様々な意見を活発に出させることはできるが、まとめるのが困難となり切り捨てなければな

ら

ない子どもの意見も出てしまう。

今後とも学校と家庭が共に人権同和教育をすすめていきたい。

三 残された課題

- ・道徳の授業における初発の発問や中心発問のあり方
- ・活動だけで終わらないためのふりかえりでの自己有用感の育て方

第5分科会 健康教育

一 研究テーマ

「子どもを育てる食のチカラ」～子どもたちのスポーツ栄養～

二 研究成果

1 ワークショップ

須坂市学校給食センター 栄養教諭
日本スポーツ協会公認スポーツ栄養士
高橋 和子先生

(1)「子どもを育てる食のチカラ」～子どもたちのスポーツ栄養～

昨今、オリンピック選手だけでなく、多くのアスリートたちがスポーツ栄養に注目している。子どもたちは体育や部活も含め何かしらのスポーツをしているため、スポーツ栄養は決して特別なことではなく、普段の食生活から親や教師の立場で何ができるのかを考える機会となった。また、スキヤモンの発育曲線から、中学3年までは、身体の出発点作りをするとても大切な時期で、食事・運動・睡眠の三角形をバランス良く保つことが重要であるとグラフを通して理解を深めることができた。エネルギー不足やたんぱく質・鉄分不足はとても重大であるため、日常生活の中で気になる症状がないか注意深く観察することや水分摂取のポイントも教えていただいたので、家庭や学校での保健指導にぜひ役立てていきたい。

(2)「補食のおにぎりを作ってみよう」

普段使っている子どもの茶碗を持参し、実際に食べているごはんの量がどのくらいか測定した後、年齢に応じて必要な炭水化物(糖質)の量について計算式を用いて算出した。1日に必要な糖質量を具体的に数字として知ること、どのくらい足りていないのか、また足りているのかを実感することができた。とてもごはんだけでは摂りきれない量であったが、実際は他のおかずで炭水化物を加えたり、補食という形で摂取したりすることで必要量が確保できることを再認識した。その後、実際に補食としてのおにぎり(梅と塩昆布入り)をグループに分かれて作り、味わった。

2 学んだこと

- (1) 成長が著しい時期にエネルギー不足におちいると、生涯にわたってその影響が出るということを学んだ。食は身体をつくること、調子を整えることと切り離せないということを深く理解することができた。
- (2) 補食のおにぎりは、1個70g=100Kcalなので、スポーツの前後で子どもがどのくらい食べたかの目安になるということを学んだ。疲労回復のために、運動後はすみやかに糖質を摂ることが重要であることや身体の疲労とともに内臓も疲れていることを知り、練習スケジュールから理想的な補食の内容や摂り方を学ぶことができた。

3 助言者の指導

高橋 和子 先生

「何を食べるか」より「何のために食べるか」が大切。日々子どもを「がんばれ！」と応援する場面があると思うが、頑張ることができる身体をつくるために食事でも応援することもできる。毎日の学校給食にはそのような思いが込められている。きれいな花を咲かせるには良いつぼみをつける必要がある。日々変化する身体をつくっているのは自分の食べたものであることを意識してほしい。

三 残された課題

全国体力調査の結果では、運動の二極化が指摘されており、運動習慣のない子が問題視される一方で、過度の運動が原因で疲れを訴える子どもや、エネルギー不足による心身への影響が課題となっている。本日の分科会では、補食のとり方で疲労回復ができることや、成長期の子どもの十分な栄養がいかに重要か学ぶことができたので、それを日々の食事作りに生かしていくこと、またそれを子どもたちに伝承していくことが課題といえる。また、家庭・学校・地域全体でスポーツ栄養についての理解を深め、子どもの心と体の健康を第一に考え、夢を応援していくことが今後も大切であると考えます。

第6分科会 子どもと地域社会と環境づくり

I 研究テーマ

学校と地域の連携のあり方

II 研究成果

1 レポート発表の概要

(1) 「子どもの遊び ～遊びを通して子どもの成長を考えよう～」

県教組上高井支部 平成30年度書記長 相森中学校 田中 英春 先生

地域みんなで子どもたちのことを考え合う「第41回ゆきとどいた教育をすすめる保護者・地域住民・教職員のつどい」の取り組みとして報告された「子どもたちの遊びに対しての意識」について、今、昔、屋内、屋外、様々な視点から遊びを見つめ、須高地区の小中学校児童生徒、保護者を対象に調査を実施した結果とつどいで出された意見のまとめ。

(2) 「地域住民・子ども・学校との関わり」

仁礼小学校 関 和之 先生

①信州型CSを通しての活動の報告

- ・放課後学習室・夏休み学習室・花壇づくり・地域探検・地籍・登山支援・土笛活動の支援
- ・読み聞かせ活動・足踏み式リードオルガンの修復

②子どもを見守る活動

- ・子ども見守り隊・交通安全街頭指導・町別懇談会健全育成・交通安全教室

大人が子どもに与える影響は、成果や数値として見えづらいが、生きていくベースになっているものが多い。子どもの健全な育ちには多大なエネルギーが必要であり手間がかかる。しかし、その手間が子どもたちを育てる。

(3) 「相森中学校コミュニティスクールの活動について」

相森中学校 岡部 温樹 先生

平成29年度にスタートした「相森中学校コミュニティスクール」の運営や組織、活動概要の報告とともに各学校の活動の様子を紹介し合い、各学校の活動を充実させていくための方向性を探った。立ち上げてそのときだけの取り組みになるのではなく、関わる人間が代わっても継続してできるしくみを考えていくことが必要である。

2 学んだこと

(1) 子どもたちとの関わりや調査活動から、子どもたちのことを内面から理解して関係づくりをしていくこと。

(2) 「どんな子どもを育てるか」地域、保護者、学校が共通の願いを持って連携し、「そのために何ができるのか」をじっくり話し合い、持続可能な仕組みをつくっていくこと。

3 助言者の先生より

北信教育事務所生涯学習課指導主事 西澤 慎治 先生

- ・調査から子どもたちの意識と保護者の意識にはズレが見られる。実態を知り、願う子どもの姿を共有し、子どもたちに対して大人がすべきこと、できることを考えていくことが大切である。
- ・これからの子どもたちのために4つの間を考えていくことが必要である。子どもの3間〔時間・空間・仲間〕＋大人の1間〔手間〕
- ・子どもたちはCS活動によって安心感のある生活ができる。願いを共有し、内部から子どもを知る機会、地域・文化・自然に目を向ける機会にしていきたい。
- ・顔の見える関係づくりをしていく。「見張られている」から「見守られている」と思える関係をつくっていく。子どもの良いところを共有して、子どもに返していくことが大切である。
- ・ボランティアの確保は、募集チラシ、すでに関わっている人とのつながり、地域企業との連携等の工夫ができる。

4 残された課題

- ・遊びに関わって大人と子どもの認識のズレが生じている実態がある。これから、地域、保護者、学校は子どもとどう接していけばいいか。
- ・活動を精選するにあたり、表面的に活動を見ていくのではなく、子どもたちを第一に考えて検討していく必要がある。
- ・多くのボランティアの方の力をお借りしていきたい。ボランティアの方たちにも満足していただけるコミュニティスクールにしていくための活動内容の検討が必要である。

第7分科会 子どもとスポーツ・遊び

助言者 株式会社BCFトレーナー 関 賢一 先生

一 研究テーマ

子ども（児童・生徒）のスポーツ活動と健全育成

二 研究成果

1 レポート発表

(1)「体力向上につながる教育環境作り」 豊洲小学校 酒井 直治 先生

子どもたちの体力低下や運動する子どもとしない子どもの体力の二極化を感じ、特に投力、握力を課題に感じた。そこで、日常的に運動に親しめる校内環境の工夫・整備に取り組んだ。校庭や中庭、児童玄関など様々な場所に運動を促す設備を設置した。その結果、日常の中で運動に取り組む児童が増えた。体力テストにも結果として表れてきた。今後は、子どもの体力への関心や、施設や道具の管理をどのように継続していくかを考えていく必要がある。

(2)「平泳ぎで25m泳げるようになるための指導法」 井上小学校 竹内 進悟 先生

6年生全員に25mを泳ぎ切ってほしいと考え、泳ぎの苦手な14人の児童に平泳ぎを指導した。はじめに浮くという感覚を身につけさせるため、だるま浮きの指導からはじめ、息継ぎ、手足の動きという順に指導した。結果14人中13人が25mを泳ぎ切ることができた。泳ぎ切れなかった児童は手足の連動ができず止まってしまった。今後は、個別の指導計画を作成し、授業の中で実践していきたい。また、手の動きに絞った指導が可能であるのか、検討をしていきたい。

2 助言者の指導

関 賢一 先生

幼少期からの運動は身体の機能を引き出し、さらに将来的にケガなどの障害を防ぐことにつながる。運動は、子どもを取り巻く周囲の環境を工夫し、「運動」としてとらえさせるのではなく、「遊び」の中に様々な動きを取り入れたい。例えば、校庭にひもでドッジボールなどに使えるコートを作っておくだけで、子どもたちはドッジボールだけでなく工夫して遊びを見つける。また、幼児に「跳ぶ」という動作を体感させるため、手足の動作を連動させるように、「手を前にあげて、後ろに引いて、ジャンプ！」と声かけをし、楽しみながら跳ぶ動作を習得できる。考えて動作するのではなく、身体で覚えながら跳ぶことができるようになる。

子どもの体力向上で大切になるのは体幹の機能向上である。そのために骨盤、大腿、股関節や内転筋、胸椎など、体幹周辺の柔軟性を高めながら機能を向上させる必要がある。そのために、ストレッチや体幹トレーニングを日常的に取り入れていきたい。

三 今後の課題

- ・全国で子どもの運動不足が問題となっている。長野県では「一週間に授業以外で60分以上運動する」と答えた児童が減少してきている。運動をしない子どもたちに運動をするように促すためには、専門性のあるスポーツを教えたり、スポーツクラブに入れて運動をさせたりすることよりも、60分間動くことのできる運動を提供していきたい。
- ・スポーツの習慣化が人体に及ぼす影響を広く周知させたい。

第8分科会 教育条件の整備

一 研究テーマ

児童・生徒が、安心して学校生活を送るための教育条件整備はどうあったらよいか。

二 研究成果

1 レポート発表

- (1) 「ビジネスマナー（電話応対）について」 豊丘小学校 馬場 加奈子さん

ん
提

学校事務職員の視点で気づいた「学校の関係者」の電話応対をはじめとするマナー上の問題を

起し、来客や保護者にとって「あたりまえ」のことである基本的なビジネスマナーを再確認。

- (2) 「小学校入学にかかるお金について」 豊洲小学校 傳田 さおりさん

ん
備

豊洲小学校では、入学準備金の減額による保護者負担の軽減を検討している。入学準備金や準備

品についての教職員・保護者との意見・情報交換からその手立てを探る。

- (3) 『子どもの貧困』を考える 上高井支部事務職員部常任委員会 渡辺 祐多さん

ん
ク
を

「子どもの貧困」についてのDVD鑑賞、子どもがいる家庭の家計配分を考えるグループワー

を行い、保護者・教職員・ひとりの人として目の前の子ども達にできることについて問題提起

を行った。

2 意見交換

- (1) レポート発表後の質疑応答

つ

「事務職員・教職員の電話・窓口対応について」「働き方改革による学校の留守番電話対応に

いて」「標準カバンの導入について」「鍵盤ハーモニカや運動着のリユース」等

- (2) グループ討議

れ

DVD鑑賞・グループワークをうけ、「子どもの貧困」について保護者・教職員・事務職員そ

ぞれの立場で感じたことや学んだこと、今後の改善が求められることについてグループ討議を行った。

- (3) 学んだこと・意見

ニ

○ランドセルは負担が大きいので、標準カバンの導入はありがたい。学校予算での鍵盤ハーモ

カ本体や給食着の購入も検討してほしい。(保護者から)

○学校で使用する物品の公費負担、リユース、学校備え付けや保育園からの持ち上げにする工夫を各校の現状に合わせて進めていきたい。(事務職員から)

○事務職員だからこそ気づくことができる子どもの貧困があると思う。家庭の困難な現状に常に留意しつつ業務にあたり、教職員と連携を図りたい。(事務職員から)

を

○実際に配分を考えてみると、想像以上に家計は厳しい。子どもにお金をかけることの難しさ

感じた。むやみに物品の購入を保護者をお願いするのではなく、保護者の負担を軽減するた

め

の工夫を考えていきたい。(教職員から)

3 助言者の指導

須坂市教育委員会学校教育課長 滝澤 学さん

ん

(1) 学校で購入する物品のための予算の折衝を、市で行っている。厳しい予算状況だが、子ども

が

等しく教育を受ける権利を守ることができるようこれからも努力していきたい。

(2) 職員の接遇の良し悪しが市民・保護者からの学校の印象となる。市役所のホームページに載

っ

ている接遇マニュアルなども参考にしつつ、今後も相手のことを考えた電話対応・窓口対応

に

ご協力願いたい。

三 残された課題

保護者からの率直な意見をお伺いし、非常に参考になった。今後は学校だけで取り組むのではなく、

P

TAや市町村教委とも協力し、効率的な保護者負担の軽減を進めていきたい。

第9分科会 情報教育

一 研究テーマ

教育現場における ICT 機器の活用と情報モラル教育

二 研究成果

1 レポート発表

- ①「低学年における情報モラル教育」 高山小学校 清水 海亜 先生
 - ・低学年では、「著作権」や「個人情報」といった言葉に抵抗も考えられるため、言葉は教えず、子どもにとって身近で考えやすい教材（学校での場面、家に電話がかかってきた場面）を内容を重視した。
 - ・児童の実態に合わせ、電話の対応も扱った。
- ②「身近な ICT を活用したモジュール学習の実践」～ ICT を活用し、「できた！」「わかった！」体験を積み上げるモジュール学習～ 高甫小学校 松倉 邦幸 先生
 - ・外国語の本格導入に向け、モジュール学習に ICT を活用。
 - ・音読、計算等の児童の実態に合ったフラッシュ教材。
 - ・「できた」「わかった」という成功体験を積み上げ、自己肯定感向上を図る。
- ③「授業における ICT の活用について」（森上小学校 黒岩 瑞樹 先生）
 - ・視覚的に問題を提示→「わかる」につながる。
 - ・書画カメラを用いて考えの発表→クラス全体で共有する。
 - ・ツールをどの授業場面で使用すると効果的か構想する。
 - ・（課題）スクリーンで黒板の多くを使ってしまう。

2 出席者からの質疑・感想など

- ・図工など、友だちの真似は確認させなくてもどんどんさせたい。→著作権に直結しないかもしれないが、お互いが納得して真似でき、トラブルが減った。
- ・低学年からモラルを守ろうとしていてすごい。
- ・中学生の実態調査の結果を知りたい→詳細はすぐにわからないが Wi-Fi は 6～7 割
- ・フラッシュ教材が共有サーバーにあるとありがたい。→希望があるのであげていきたい。
- ・スクリーンで黒板を使ってしまう場合、ホワイトボード機能に変えることができる。

3 講演および助言者からの指導

講演「教育現場における ICT 機器の活用と情報モラル教育」

須坂市技術情報センター所長 小林 晃 先生

- なぜ教育現場に ICT 機材が入ったか→プログラマーを育てるわけではない。
 - 保護者の期待は高いが現場では進まない。（設備・教員リソース）
 - IT 機器に期待できること・IT にできること
 - ・これからの時代に合った子どもの資質、能力の向上 ・「学校」という職場の働き方改革 ・作業の自動化→時間の壁を壊す。
 - 子どもを守るために…子を守るのは大人
 - ①フィルタリングでモニタリング
 - ②保護者とともに学ぶ情報モラル
 - ・子どもの使い方の実態把握 ・危機回避の方法 ・正しい使い方、知識が必要
 - ③インターネットと上手に付き合うための力をつけていく
 - ・判断力 ・自制力 ・責任力 ・想像力
 - ④知識の習得と道徳教育が重要
 - ・電話の仕方がわからない ・スマホやタブレットは使えるが PC は使えない。
- ※ルール決めも、本質を失わないように
ex)「ネットは 10:00 まで…」→睡眠をとるためのルール。「10:00 からは漫画を読む。」とならないように。

☆一番大切なのは、相手のことを想像する力＝生きるための力

三 残された課題

- ・予算にも関係するが、IT 設備・指導できる教員が少ない。

第10分科会 国際理解・コミュニケーション活動

一 研究テーマ

英語を使ったコミュニケーション活動と国際理解教育

二 研究成果

1 レポート発表の概要

(1) 「デジタル教材とオリジナル教材を使った外国語活動の実践例」 仁礼小学校 兼橋 慶一 先生

- ・話すことに関してオリジナルの活動を行う。人間関係を作り子どもの実態に合った英語表現を用いる。ALT と担任で モデルを示す。 →活動例の動画「文房具を探せ」
- ・今後の課題として学びの質の向上を目指したい。accuracy (正確さ) と fluency (流暢さ) どちらに重点を置か。観点を意識させることで、ただ楽しいだけでなく技能を高めることを目指していきたい。

(2) 「子どもたちが自ら関心をもって学ぼうとする外国語活動の授業づくり」 須坂小学校 廣田 悦子 先生

- ・児童自身が主体的に関わるために「自分自身に関わる内容」を英語で表現できる活動にする。
- ・何を学ぶかを意識づけるために「単元の目標 (Lesson goal)」と「毎時間のめあて (Today's goal)」を明確にする。
- ・ALT 主体の授業から担任主体の授業に移行する。

2 学んだこと (参加者討議より)

- ・子どもが楽しく授業をしている様子が知れてよかった。親世代はどうしても苦手意識があり、家庭でも英語に親しめればよいが、どのようにしたらよいか悩む。(保)
- ・小学校と中学校でギャップがあるのでは。中学に行くと「勉強」になってしまう。(保)
- ・「J-SHINE」という英語指導者認定を行っている団体があるので、小学校でも活用したらどうか。(保)
- ・センテンスの正確さをどこまで求めればいいのか悩んでいる。(教)
- ・発音の正確さより「伝えたい」「伝えよう」という意識が大切だと感じている。(教)

3 助言者の指導 信濃教育会雑誌図書編集部長 竹前 傳藏 先生

- ・外国語活動は学級経営につながる。子どもの実態や他教科との関連がよく分かっている担任が授業をするよさはそこにある。
- ・間違えないようにするためには「間違えないとダメ」。英語はたくさん間違えないとダメ。
- ・最初からフルセンテンスを求める必要はない。日本語だって文章すべて言わなくても通じる。
- ・自分のことを伝えられる活動を。一斉から個へ深めていくことが大切。
- ・ALT との連携。担任と ALT のコミュニケーションを子どもに見せることが大切。ALT と担任がつながる、ALT と子どもがつながる。そういう人と人がつながる授業をつくってほしい。

4 講演・ワークショップ ALT レッドフォードⅢ ジェームズ ウィリアム先生

- ・参加者自己紹介ゲーム…英語を使って5分間で10人と自己紹介し合う。
- ・YouTubeの歌の紹介…「あいさつ」「数」「色」「形」「野菜」など歌ったり踊ったりしながら楽しく覚えることができる。(低学年は特に喜ぶ)

5 助言者まとめ

- ・素晴らしいデジタル教材が出てきているが、人がいるからこそコミュニケーションになる。
- ・中学校では「生徒が今まで習ってきた英語を総動員する活動」を目指したい。

- ・「英語を使って伝え合える喜び」がその後の学びの源泉となる。

第11分科会 特別支援教育

一 研究テーマ

学校・家庭・地域で連携して進める特別支援教育

二 研究成果

1 レポート発表の概要

(1)「家庭と連携して進める特別支援教育」 仁礼小学校 高橋 明日美 先生
子どもに適した支援・指導を行うために、家庭と学校で連携して進めてきた。連携の例として、関係の先生方に参加してもらう支援会議を学期に2回、保護者と原籍学級担任との三者で日々の様子を連絡しあう情報交換会を月に1回、また日々の連絡帳等を通して意見や情報を共有して取り組んできた。保護者、原籍学級担任、支援学級担任が共通の支援を行うことにより、学習や生活での意欲の向上につながったと思われる。卒業に向けて3学期の支援会議には中学校の先生に入っていたき中学校の参観等実施した。中学校進級に向けての小学校での支援、中学校とのよりよい連携はこれからも考えていきたい。

(2)「学校内で連携して進める特別支援教育」 高甫小学校 西澤 澄子 先生
児童一人一人について考え、校内全体が支援の対象との視点で取り組んできた。児童の実態にあった学習活動やその子の特性にあった効果ある支援が不十分と思われる実態がみえてきた。そこで、児童一人一人が安心して活動できる場の提供を目指して、教室配置や教室環境の整備、ICT教材等の活用、職員会や校内支援委員会を通しての情報共有等に取り組んできた。全職員による時間割把握とチーム支援体制は、休み時間等のすきま時間の支援も組み込むことで、細かな支援を行う上で有効だった。子ども同士による支え合いの場として縦割りの活動の充実も図った。スクールカウンセラーや教育巡回員との連携は、保護者のご理解を得られ支援学級の開設につながった。年単位で職員が変わる中、チーム支援の維持と発展が今後の課題と思われる。

2 学んだこと

支援情報の共有と引き継ぎが大切で、幼保→小→中→高でどのような支援をしてきたか、どのような支援をしていくかを一緒に考えていくことが大事である。また、支援情報の共有や支援を引き継いで行く上で重要なのは、個別の指導計画と支援計画である。

3 助言者の指導

東御清翔高等学校 校長 佐原 智行 先生

長野県東御清翔高校は2011年に多部制単位制高校に転換。2018年に通級による指導が国において制度化され、それを受けて2019年に通級による指導を開始する予定である。通級による指導は、選択教科・科目の一部に変えて単位を認定していく。

スタートにあたっては、生徒と通級担当教員との関係作りはもちろん、チームで支援するための校内支援体制の構築に取り組んでいる。

順次、県内の高校でも通級での指導が始まっていくため、中高の連携と支援情報の共有は、より重要性を増していくと思われる。

三 残された課題

小→中→高の連携の一環として・・・

- ・自己理解（得意・不得意）を小学校から進めてほしい。
- ・進路選択に関しては、早めに（3年生に限らず）受験希望・候補の高校に相談してほしい。

第12分科会 表現力・感性、思考力の育成

一 研究テーマ

子どもたちの豊かな表現力や感性を育てるための指導・支援のあり方

二 研究成果

1 レポート発表の概要

- (1)「表現の工夫の支援について」 栗ガ丘小学校 新井 美季 先生
5年生の「リボンのおどり」のパートの重ね方を工夫する場面で、範奏 CD を聴いてイメージをもったり、ワークシートを用いてパートの重ね方を可視化・共有したりすることによって、思いを持ってパートの重ね方を工夫し楽しみながら演奏することができた。
- (2)「中学校音楽科におけるボディパーカッションの授業実践」 小布施中学校 稲村 くるみ先生
リズムを体で感じられるようになってほしいと願い、ボディパーカッションの曲に取り組んでいる。身近な曲のリズムを打ったり、リズム主体のパフォーマンスを視聴したりして意欲を高めるなど、工夫して実践を重ねている。
- (3)「子どもと数学の良さ」 高山中学校 三井 貴博 先生
思考力の向上をめざし、生徒との何気ない会話を大切にすることから取り組んだ。できたら褒め、喜びを実感できる場面を多くした。質問できる環境づくり（質問できる時間・機会を多くとる、提出ノートの活用）をすすめた。質問する→わかる→自信を持つ→もっとやってみよう、という変化が見られた。質問のしかたも次第に具体的に上手になってきている。

2 学んだこと

北島先生のご指導で参会者全員が関わり、リトミックの体験をした。ペアやグループで音楽やリズムに合わせて身体を動かしたり、自分たちで工夫して音楽を構成したりする活動を行った。音楽と合わせる楽しさや人と関わって音や動きを作り上げる面白さを味わうことができた。北島先生のするどい観察眼と、どんな表現も受け止める対応力、さらにそれを楽しみ活動にしていく構成力がすばらしく、学ぶことが多かった。子どもを乗せる言葉がけ、何を取り上げて広めるかなど、日々の子どもの対応に生かせるヒントがたくさんあった。

3 助言者の指導 リトミック研究センター長野第一支局チーフ 北島 由美 先生

お互いに目を向けて聴き合うことをしっかりと習慣づけたい。友達とペアを組むところから人間関係づくりが始まっている。遊びの中で力をつけていく。わからなかったりできなかつたりしてもあきらめずにがんばっている姿を大切にしたい。「前よりできたね!」と変化を認め励ましたり、「楽しそうだったね!」と取り組みの良さを広めたりしながら全体が目指すところへ向かっていけるようにする。子どもが自分で考えたり、やり方を決めたりする場をつくる。いろいろな個性の子がいて、表現の仕方も理解の仕方も一人一人違う。それぞれの良さや特性を周囲の者がよくわかって対応することが大切。

三 残された課題

- ・何を指すのか、どんな楽しさを目指し、どんな力をつけたいのか、見通しを明らかにし、子どもたちの表現力や思考力を高めるための支援や声かけの工夫、教材研究をこれからも続ける。
- ・数学の提出ノートを丁寧に見たいが時間が足りない。よい工夫があれば知りたい。

第13分科会 子どもと本

1, 研究テーマ

子どもが読書に親しみながら、心豊かな生活を送れるようになるための、学校・家庭・地域の支援のあり方

2, オープニング・・・たんぽぽの会のみなさんによる読み聞かせ

① だんだのみ ②花さき山 ③ぼくだけのこと ④おかあさんはね

3, レポート発表

小山小学校での実践「読み聞かせの会に参加して」 小布施中学校 浅野恵子先生

・保護者の都合つく日に読み聞かせをする活動が（週1回火曜日の朝に）始まり参加してみでの感想や様子を発表していただいた。参加してみて、生徒の普段の様子や学級の雰囲気を知るよい機会となった。また保護者が教育活動に参加しやすい面もある。



・読み聞かせをした本は「なつのいちにち」

・「相手の気持ちを考えて」というが「人の気持ちなどわからない」という生徒もいる。読み聞かせをする本は、保護者のそれぞれの思いや感覚で選ぶ本なので、いろんなジャンルの本に出会うことができるよい機会である。本は主人公と共に疑似体験をしたり、想像力を膨らませたりでき、子どもの心が育つのではないかと感じた。

*その後グループで読み聞かせについて話し合いを行った。

4, ビブリオトークについて

ビブリオトークとは、ゲーム感覚で楽しめるブックトーク

I 本来のやりかた

①好きな本を持ち寄り集まる（グループになる）②1人5分間で本を紹介する③全員が終わったら机に本を並べ、一番読みたくなった本をセーので指す④そのグループのチャンプ本が決定⑤チャンプ本になった人が前が出る。⑥もう一度1人5分で本を紹介⑦全員終わったら発表者は後ろを向き、本の表紙をみんなに見えるように持つ。⑧一番読みたかった本に挙手⑨全体のチャンプ本も決定！



II 実際グループにわかれてやってみる

本来は5分だが、今回は人数も多かったため2分で行った。チャンプ本は「空からみた桃太郎」

5, 助言者の方によるご指導

須坂市立図書館 館長 文平 玲子さん

今朝の新聞でもスマホ依存症の話が載っていた。7人に1人の割合になる。スマホで何をしているのか？便利で使いやすいのは大人も同じ。子どもばかり責められない。子どもはゲームをして主人公と同じような体験をしているのではないか。スマホより、人と人とを繋ぐ関係をつくってほしい。本をツールとして繋がれた体験を今日みなさん（本日の参加者）は体験しているので、この効果をぜひ子どもにも伝えてほしい。大きくなったから勝手に本読むでしょう、ではなく、「この本面白かったよ」「今どんな本読んでいるの？」と、本を通してコミュニケーションをしてほしい。本はコミュニケーションのツールとなるし、本は個人のものであるが、本は大勢で共有できるものでもある。ぜひ本を間においたコミュニケーションをとって行って子どもの心を育てていきましょう。ぜひ須坂市図書館も利用してもらい、新刊も毎月出しますので希望を出してほしいです。

6, これからに向けて

ビブリオトークは学校でできそうである。須坂市では生涯学習スポーツ課が出張で行ってくれるため、ぜひ利用し、本に親しむ生徒を増やしていけるきっかけにしていきたい。

あとがき

9月1日(土)に須坂市立墨坂中学校を会場として、第65回上高井教育研究集会を盛大に開催することができました。本集会は、「上高井教育の充実を図るために、教育会・両教組が一体となって現場における教育実践を持ちより、研究協議を通して、その意義を確かめ合い、研究の深化発展を図り、教育推進への自覚を深める。更に、保護者・地域住民の協力参加を得て、地域教育の振興をはかる」ことを基本方針として、当日は、テーマ別に13の分科会に分かれ教職員・PTA・関係諸団体等、総勢600名もの参加者を得て、今日的教育課題について討議を深めることができました。各分科会場では、日頃の教育実践や問題提起をはじめとするレポート発表を中心に、実技や講習などを加えながら様々な角度から研究が深められました。ここに学校・家庭・地域が一体となって教育問題に取り組んでいこうという力強さと熱意を感じました。多くの方から「参加してよかった」という声を聴くたびに関係者の一人としてほっとしているところです。当日、実践報告をしていただいたレポート作成者の皆様には心より御礼申し上げます。また、助言者の皆様方からは、明日、子どもたちを目の前にしてすぐ実践できるようなご助言を丁寧にご指導いただきましたこと、改めて御礼を申し上げます。

このように成果のある教育研究集会になりましたのも、助言者との打ち合わせから分科会の運営にあたるまで綿密な計画を立てていただいた分科会長の皆さんをはじめ、当日の司会者・記録者の皆さん、レポートの回収並びに配付、参加者のとりまとめをしていただいた学校代表者の皆様、そして会場を提供くださいました墨坂中学校の校長先生はじめ先生方、生徒のみなさんのおかげであると、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

最後に、本教育研究集会推進に関われた三団体の代表者の皆様の日程を記し、次年度へ繋げます。

4月23日	第1回三団体代表者会	・基本方針の確認、推進方法の確認等
	第1回推進委員会	・係分担・推進日程の確認、分科会希望調査の検討等
5月2日	第2回推進委員会	・分科会設定に関する検討、提出レポート調査検討、他団体要請等
5月10日	第1回学校代表者会	・基本方針・推進日程の確認、提出レポート等調査依頼等
5月21日	第3回推進委員会	・参加者確認、分科会長選定・依頼、分科会助言者の選定等
6月12日	第4回推進委員会	・分科会長会・中間連絡会の持ち方、レポート形式、他団体・来賓参加依頼等
6月19日	分科会長・司会者打合会	・日程確認、討議議題確認、研究計画の立案、分科会運営計画作成等
7月9日	中間連絡会	・分科会討議計画・記録について、分科会要望書作成等
	第5回推進委員会	・参加者名簿の作成集計、要項作成、当日日程の検討等
7月20日	第6回推進委員会	・集会要項校正、会場確認、係分担、
7月21日	学校代表者会	・レポート交換、集会要項配付
	第7回推進委員会	・今後の日程の打ち合わせ 使用物品・人数確認
8月31日	分科会長会	・前日準備、反省まとめの依頼、当日の動きの確認
	第8回推進委員会	・前日準備、最終確認
9月1日	教研集会当日	
10月2日	第9回推進委員会	・概要の編集、反省の集約、代表者会について
11月20日	第2回三団体代表者会	・三団体への答申、会計中間報告、反省総括等
2月15日	第10回推進委員会	・会計監査、反省

平成30年9月吉日

第65回上高井教育研究集会推進委員長 黒岩 龍也